

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒190-0013
東京都立川市富士見町2-12-13 安藤ビルB1F
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

無料

第5号

毎月発行

創刊2012年(平成24年)10月16日火曜日

2012年(平成24年)10月16日 火曜日

岩手県沿岸部は復興しているか

大震災から1年半経った釜石、両石、大槌、吉里吉里、山田湾はどうなっているか

九月十六日早朝、釜石駅でレンタカーを借り、岩手の沿岸部を北上した。最近めっきり被災地報道が減少したため、被災地の状況がまったくといっていいほど伝わってこない。そこで、あの大震災から一年半後の状況を自分の目で確かめたくなったのだ。はじめは電車で移動しようと時刻表を検索したが、釜石の北も南も沿岸部は寸断されたままでも運休中だった。それでレンタカーに切り替えた。



破壊されたままの大槌町役場

その現場にガレキはなくなっているが、復興という状況からはほど遠い。何も進んでいない。

さらに北上し、次に止めたのは、同市・鶴住居(うのすまい)町。大きな集落があったのだろうが、破壊された鉄骨造りの建物以外は大槌町に入る。さらに風景は悲惨なものになる。何もなくなってしまう町。

京都から来たという学生ボランティアの集団に会った。橋を渡ろうとしたら、右手にはガレキの山がいくつも並んでいる。ガレキを整理する巨大なショベルカーが隠れてみえなくなるほどだ。左手には、津波に襲われて、三階まで破壊された集合住宅。津波で流れてきたゴミがベランダにひっかかっている。大槌町役場は、見るものを悲しみのどん底に突き落とす。ここで犠牲者が出たことが直感で分かる。何のために残されているのか理解できない。

突然の悲しみが襲ってくる。吉里吉里半島の赤浜に行く。漁船が十数隻見える。漁師が三人ほど網の手入れをしていた。海底にあるガレキ引き上げ専用の「潜水中」の旗のあ

る船が二隻係留されていた。行き止りを戻り、次は吉里吉里海岸。ここにも砂浜のガレキを拾うボランティア。遠くに巨大なガレキの山が海の方にせり出している。

船越湾をはるかな高台から見たとききれいな青い海が広がっている。普通の夏の海。牡蠣棚も少し見える。遠景はしばしばとさせ

る。山田湾にある「かき小屋」で昼食。当時の大津波の様子の店の人に聞く。織笠で車を止め、津波が襲ったであろうと思われる地域を見る。岸壁にも出てみた。大分整理されたのだと思ったら、岸壁には根元から大きく折れ曲がった街灯が地を這っていた。

今回の最終目的地は山田漁港岸壁。そこには巨大なガレキ処理機械というか、船と形容すべきか、よく分からないものが係留されていた。そして、壊れた漁船が引き上げられて積載されて

東北は見捨てられていたのか

ここまでの道中、車とすれ違うことはあっても、道を歩く人にはめったに出会わない。しかし、そこでようやく多くの人に出会った。山田町の夏祭りだった。死んだように静かすぎる沿岸地域で唯一の賑やかさであった。

こうした風景を自分の目で見るまでは、もつと復興・復興が進んでいると思っていた。いくら進まないと言いつつも、もう大震災から一年半も経過したのだ。これほど何も進んでいないとは思いたくなかったし、少しぐらいは建物の建設が始まっているだろうと思っていた。しかし、進んだのはガレキ集めだけである。あちこちに分散するガレキを集めて小山をいくつも作っておくだけであり、ガレキの小山が並んでいるだけである。

目の前にそうした光景ばかりを突きつけられているうちに怒りがこみ上げてきた。被災者の方々が一番怒っておられることは百も承知でありながら、部外者でたまたま立ち寄った筆者ではあったが、怒りで身体が震えた。何ということだ。そして、この状況を知らずにいた自分にも腹が立った。

言葉では、復興はまだまだで時間がかるだろうと簡単に言える。しかし、ここではそうした言葉は空しく腹立たしい。阪神淡路大震災とは異なるのだ。時の政権の実力だけの違いなのか。それとも阪神という都会と東北の田舎の違いで、これも対応の仕方が異なるというのか。先月の九月二二日。この日は、いまだ一四四年前の一八六八年、会津若松城落城の日。実質的に戊辰戦争で奥羽越前藩同盟が敗れた日。そして、東北の苦難が始まった日でもある。これがいまだに続いているとは思えない。

この私見が極論であり、賛同できないという人でも、このまま被災地の状況が変化せず、岩手県沿岸部もその他の東北被災地も放置され、さびれていくのを傍観し続ける可能性は今のところ非常に高い。数年後の変わらぬ風景を見せつけられたそのときでも、東北は差別されてはいないと真正面から言えるだろうか。

この状況から間違いなく抜け出すには、世論を味方にするだけでは足りない。マスメディアは興味の対象を他に移している。政治や行政はこの先も期待できない。とすれば、自助努力しかない。自ら立ち上がるしかない。そうした声が大きくなり、被災地で、そして東北でひとつにまとまっていくときにこそ、本当の復興が始まる。



山田-折れ曲がった岸壁の街灯



大槌-集合住宅



両石-壊れたままの防波堤裏側



山田-巨大ながれき撤去機械



吉里吉里-高台にある橋



大槌-ガレキの山

東北の祭 復興パワーの源

復興の中心に祭りを!

東北震災発生から一年半が経過した。まだまだ被災地には支援が必要だが、これからは受身だけの支援では不足である。復興に向けパワー全開にしていくには自助、自力による復興活動、その他さまざまな活動が必要である。そして被災者自らも受身から積極姿勢に転換したいと願う時期でもあると思う。

しかし、目の前に広がるこの未曾有の被災状況から立ち上がろうとするとき、大きな心の支えが必要である。それは何だろうか。きびしい現状に立脚し、自らを奮い立たせ、まったく先の見えない未来に向かって前進しようという気持ちになるために必要なものは何だろうか。

キーワードは、血縁、地域、先祖、伝統、あらゆる結びつき、熱情、無心になること、人間をはるかに超えるものへの祈りである。被災地である自らがいる場所を基点とした空間の広がりや時間の広がりや背景に、個々人の身体の奥底にパワーを湧き出させ、前進させるもの。それはまさしく「祭」そのものである。

祭開催に必要なあらゆるものが津波によって破壊され祭の継続がむずかしくなっている場所がある。あるいは地域の人がよそに長期避難したため、祭の開催がむずかしく、結果、存続さえ危ぶまれているところがある。それでも、被災地では他にすべきことに優先して祭を開催したいと頑張る。無くなった祭の道具をいち早く揃え直す。避難している人々を呼び戻すために祭を復活させる。なかには、あまりにも元の住人が少なくなつて祭が開催できない場所では、ボランティアが祭の開催に尽力する。これはもう人の力を超えた、この土地がもともと持つ力とはいえないか。

祭とは、単なる季節ごとのイベントではない。観光事業のひとつでもない。前記のキーワード、血縁、地域、先祖、伝統、あらゆる結びつき、熱情、無心になること、人間をはるかに超えるものへの祈りが詰め込まれたもの、日常のなかの非日常である。

現代の日本人は、戦前まで続いた伝統を敗戦とともに捨ててきた。あるいは、戦後占領政策のなかで、神と名のつくものは捨てさせられた。それでも祭はそれぞれの地域に生き残っている。被災者は祭で再生のエネルギーを得る、祭は人々のエネルギー再生の場といったら言い過ぎだろうか。

祭はもつともつと見直され、奥深くまで掘り起こされていくべきだと思う。

遠野祭

神々の祭

63団体 8000人の祭り
祭の意義を問い直させる祭

2012.9.15-16



しし踊り

遠野のことは少しは知っていたが、遠野祭のことは知らなかった。十数年もこの祭を見続けているという友人にこの祭のことを聞いて

ていたらどうしても見たくなった。それで急遽、祭開催の九月の十五、十六日の二日間の取材を決めた。

普通の祭ではない

今回の遠野祭取材で、祭り全体を語るといふほど、祭のすべてを見た訳ではない。何せこの祭には、六三団体、約八千人が参加し、十五日の午前中からその日の夜、さらに十六日は朝から夕方まで行われる。また、同一時間にまちのあちこちからさまざまな踊りがいつせいに演じられるのだ。したがって一人ですべての演目を見ることは不可能である。こうした規模の祭はあまりないだろう。

加えて、遠野市の人口が約三万人、祭に参加する人が約三万人、祭に参加する人々を別にすれば、遠野市の人間の半数近くが参加するのだ。尋常ではない祭である。単に祭を観光事業の中心に据えたまちななどという定義づけには到底収まらない。やはり、この祭は現地に行つて見て、実感するしかないと思う。

六三団体の演目は、まずは神輿の練り歩き、多くの神楽の演目、南部ばやし、さんさ踊り、そしてしし踊り。それぞれのジャンルにいくつもの団体があり、どれひとつとして同じものはない。多様性にあふれている。初めて見る人には、到底その違いがはつきり区別できないが、明確な特徴があるという。

遠野物語でも有名なまち、またかつて有名だが、この祭を見れば、そこから来るイメージをはるかに凌駕することが分かる。それにしても、この祭を支える遠野の熱い心とはいったい何だろうか。

地域ナビゲーター 発掘

遠野の駅に着いたのは祭開始の一時間ほど前の十時。祭の最初から最後までもれなく見ようと早めに着く段取だった。しかし、遠野駅舎を出るなり、すでに神輿がまちに出ていて、ではないか。案内と見比べるが、間違いない午前十一時のパレード開始とある。全体パレード以外にも五月雨式に練り歩いたり、門付けしたりするのかもしれないと納得し、とにかく神輿の行く先、人の流れについて行こうと、市役所方面へ向かう。

「おっかけ」と化した。佐々木さんには祭りの二日間度何度お会いしたことが。それで分かったのは、昼と夜の踊りが別物で、夜になると踊りが熱を帯びるといふこと。日中のしし踊りは健康的だが、夜はまったく違う様相を見せる。暗闇のなかで激しく踊る姿はまことに迫力がある。踊りにもストーリーがあり、これが分かればさらに奥深い理解が得られるのだ。

まさか偶然に、格好の遠野祭の地域ナビゲーターを二名獲得することで、より深く祭りの見所をみるこ

神々の住まう ところ

二日間祭りを追いかけてながら遠野祭を考えさせられたことがいくつもある。まずは、何と云っても地域社会のまとまりということ。祭が地域の人々を固く結びつけている。地域の横のつながりもそうだが、祖父、親、孫のタテのつながりも緊密だ。家族総出の練習もかなりの時間を費やすことだろう。祭り当日は日頃の練習の最終仕上げの日でもあるだろう。わが子、孫、地域の子供への応援もすごい。母親などはつきつきりである。

そして祭の季節に他の地域に出ている遠野出身者はみな帰ってくる。帰れば、お囃子を聞いただけで座つていられないという。踊り出したくなるという。

最近よく地域の活性化という言葉を聞くが、ここでは単なる抽象概念ではない。まちぐるみの祭への熱中を見れば活性化という言葉もどこかへ飛んで行きそう

最後に。十五日の夜は釜石市に移動したが、その移動途中で、「鹿」が電車にぶつかつてしばらく停車した。「しし」ならぬ「鹿の激突」。これまた得がたい経験をした。

それが出来た。何も分からず外観だけ見てもまったく理解できなかったであろう。まさに幸運であった。遠野祭には地域ナビゲーターがいた方が断然いい。そのおかげで筆者は、祭の入り口に何と云ったどり着けた。

それにしても、大人も子供も二日間延べ何時間踊るのだろう。一年中の元気をこのたった二日で発散する祭とは何だろうか。義務感だけで二日間も踊り続けることはできない。このエネルギーはどこから来るのか。観光で人寄せなどが目的ではない。ただ、よそから人が押し寄せてくるから見せているだけという感じである。祭を甘く見ていた。こうしたことの背景には、遠野にはいまも神々がいるからだと思える。人間は宗教心がなければ生きられない。それは今の日本人がすっかり忘れてしまっている。あるべきところにあるものがないという空虚に苦しんでいるものである。とはいえ、神々と一体になるということは、そんなに簡単なことではない。誠心誠意、身を清め、祈る。日常生活から隔絶した非日常のなかで人間をはるかに超越するものと一体化する。そこに祭の真の精神がある。きつとそういうことなのだろうと思つた。こうしたことを考えさせられた二日間であった。



南部ばやしの小さな踊り手



夜のしし踊り



額に汗して真剣に踊る



夜も踊る子供たち



3人の神楽の舞い



さんさ踊り



流鏝馬行進



神輿



刀がけ



猿田彦



勢組の神輿



獅子舞い



神輿



遠野のかっぱは赤い顔



途中まで食べて撮った遠野ラーメン



うめのや看板娘たち



佐比内獅子踊 佐々木さん



つい迷いこみたくなる路地



りっぱな神輿

九月十六日の釜石市を基点とした沿岸部を北上する取材はとても重苦しかった。行けども行けども、見渡す限り津波で破壊されたまちの光景しかなかった。ガレキの山しかなかった。復興に向けて前進する雰囲気は、ほっとすると同時に、気分一転、今後の復興が大いに期待できると心強く思えたのだ。

山田町は、今回の取材の終点だった。重苦しいまま取材が終わるのかと思いかけたところ、道路にバラバラと人が歩いている。岸壁

祭に復興を誓う！
エネルギーみなぎる
夏祭り
 岩手・山田町



虎舞

に向かつて歩いていく人がいる。近づいたら、小さな山車を数人で曳いていた。写真を撮ろうとさらに追いかけて行ったら、岸壁にたぐさんの人がいた。突然の人だかりにこちらもびつくり。さらに近づくと、多くの山車と、さまざまな祭の衣装をまとった若い人たちが岸壁を埋めていて、歩くスペースもないほど。ようやく夏祭りが始まる直前であることが分かった。

人をかき分けて人だかりの中心に進んでいく途中、ひとつの山車がこちらに向かって猛スピードで走ってくる。脇によけた。すぐさま山車が引き返してきた。また脇によける。威勢のよ



岸壁は人でいっぱい



しし踊り

これからの山田町の復興を祈りたい。そしてその他の岩手沿岸部のまちの復興もあわせて祈りたい。大震災で被災した多くのまちの復興をお祈りしたいと心から思った取材であった。

エネルギーに満ち満ちた祭を見ていて、このまちはいまだ大震災から立ち上がろうとしていることが痛いほど分かった。大変な思いを乗り越え、こうした前向きな心情に転換するにはものすごくエネルギーが必要。祭に熱狂する人々を見ながらそう感じた。

「虎舞」があり、「しし踊り」があった。いろんな海の産物を飾りあげた山車もある。若い女性たちの踊りもある。とにかく岸壁は人でいっぱい。若い人も年も、男性も女性も参加している。

い掛け声のなかでのパワフルな山車の引き回し。神輿もあった。神主さんが御祓いをする。大勢の関係者が祈る。その御祓いに込めたさまざまな思いを想像してグッときた。

雄勝法印神楽
(宮城・石巻市)
鎌倉講演と映画上演
於：鎌倉芸術館
2012.10.6



演目一醜女退治より

宮城県石巻市にある雄勝地区は「雄勝硯」で有名なまちである。最近では、東京駅舎復元にあたって、屋根に「雄勝スレート」が使用されたことでも有名になった。このスレートは硯と同じ素材から出来ている。

しかし3・11の東北大地震では甚大な被害を受けた。雄勝は太平洋に面する三陸リアス式海岸の沿岸地帯であり、南三陸金華山国定公園でもあるが、津波被害はとて大きく、言い尽くせないほどの大被害をもたらした。

結果、硯産業もスレート産業も壊滅した。漁業・



演目一醜女退治より



演目一醜女退治より

養殖業も壊滅した。町全体も壊滅した。震災直後の映像を見ると、沿岸部には何も残っていない。

今回の「雄勝法印神楽」は、そうした被災の町の祭であり、伝統芸能であり、被災した人々が大変な思いをして復活させた祭なのである。

「雄勝法印神楽」は、室町時代からの六百年以上の歴史を持ち、国指定重要無形民俗文化財に指定されている。



鎌倉芸術館



演目一産屋より

実は、今回の鎌倉公演は昨年十月の開催に続くものである。大震災復興支援の一環として、昨年は「鎌倉宮」で開催された。今回

門家と地元の舞い手たちが協力して、面や衣装などを昔の写真、舞い手の記憶などを丹念に掘り起こしながら震災前の姿を忠実に取り戻している。その経過はドキュメンタリー映画で見ることが出来る。他の何を差し置いても、六〇〇年以上続いた伝統を途絶えさせはならないと、この祭の復活にかけた被災者の思いも映像からひしひしと伝わってくる。



手塚真監督挨拶



演目一産屋より

二年連続開催となった鎌倉と雄勝の縁は、鎌倉宮のご祭神の護良親王(後醍醐天皇の皇子、一三三五年に殺害されたというのが通説である)が、実は生きて宮城・石巻に落ち延びたという伝説が縁だといふ。

「雄勝法印神楽」の「法印」とは山伏、修験者のことであり、出羽三山の羽黒山系の山伏、修験者が伝えたとされている。昔は、

山伏、修験者が日本国中に文化を伝える役割を担っていたのだ。

この神楽は、古事記などの神話を題材にしたものである。今回の公演では、「日本武尊」、スサノヲを題材にした「五矢」、醜女退治、「産屋」の四演目の一部が演じられた。

この神楽は非常に動きの早いアクロバティックな要素がふんだんにある。公演された演目のなかにある「醜女退治」では、神楽の舞台の上に渡された板の上に立ち上がり、そして下の舞い手と刃を交えるというような曲芸師のような場面もある。太鼓と囃子のリズムがそうした激しい動きを演出している。



演目一醜女退治より

当記事の写真だけでは動きは伝わらないが、動画も撮影しているのので、そちらを参照されたい。

<http://www.youtube.com/watch?v=OgNvSt1rcl&feature=plcp>
(タイトル：雄勝法印神楽 鎌倉公演 201210)

6) | tohokufukko 制作

ドキュメンタリー映画にもあったが、この神楽の舞い手は、ひとつだけの演目を演じる訳ではない。担当演目はいくつもあるうちのひとつが当日決まったりするようだ。すなわち、舞い手はすべての演目を演じられるようにしておかなければならないということである。小さいころから、神楽を見て育ち、同時に何度も何度も練習していなければ出来ることではない。それだけに、神楽は身体に染み込んでいるともいえる。



演目一醜女退治より

地域の祭と今度の大地震からの復興ということを考えるとき、祭の持つ力は想像以上にとても大きい。他の地域でもそうだったが、生きるための最低限の用意を整えた後に即座に思いつくものは祭の開催であった。

祭は、人間が生きていくには食物や睡眠など最低限に必要なものの次に重要な

ものなのである。

さらに祭は宗教でもあるといえる。日本には宗教がないと教えられてきたが、祭という立派な宗教儀式がある。敗戦後は宗教部分の切り離されているので、単なる祭イベントのように思われているが、決してそんなことはない。これは間違いなく宗教である。だから被災者が求めたのだ。被災地から諸般の事情で遠くに避難している者にも祭りは必要なのだ。祭の囃子を聞くことも冷静ではいられなくなるのは、そうしたことによる。やはり復興と祭は切り離せないようだ。



出演者から感謝のあいさつ

この公演のことを知ったのは、筆者の高校の同級生と都内で何十年ぶりで会ったことがきっかけだった。その同級生が、この企画に関わっていたこともそのとき初めて知った。新聞の取材ではたまにあることではあるが、まったく不思議な縁である。

【Tiny Log】
用途ご自由のまるいケース
革は薄めの柔らかなものを使用
サイズ:70mm(縦)×70mm(横)重量:40g
価格:¥3,500(税込み)
⇒ ¥2,800(税込み)

【Tiny Dice】
用途ご自由の四角いケース
革は薄めの柔らかなものを使用
サイズ:70mm(縦)×70mm(横)重量:40g
価格:¥3,500円(税込み)
⇒ ¥2,800(税込み)

☆革物屋☆
かわもんや
<http://prewords.jp/>
E-Mail: contact@prewords.jp
TEL/FAX: 042(562)3507

Prewords

**新聞創刊
ディスカウント
(20% OFF)**

※カラー展開はそれぞれ5色
オレンジ:鮮やかな橙色、使い込んだ後の渋みが楽しみ
キャメル:5色の中で最もヴィンテージ感のある色合い
ブラック:スタンダードな黒、ビジネスにもプライベートにも
ワインレッド:落ち着きのある大人の赤
グリーン:深みのある優しい緑

【Handy Pouch】
モバイル機器収納など、用途は自由自在
革は薄めのやわらかいものを使用
手触り感を重視
サイズ:105mm(縦)×210mm(横)×60mm(奥行)
価格:7,800(税込み) ⇒ ¥6,240(税込み)

「憂いのない備え」のため に「伝家の宝刀」を

「自然災害ワーストワン」は宮城県?

「都道府県のワーストワンを描いた地図」というものがネット上にある。その中で宮城県の全国ワーストワンは「自然災害」である。この地図は東日本大震災の一月かほど前に作成されたものである。それを踏まえてのものではない。しかし、住んでいて風水害が顕著であるとは思えないので、これはほぼ間違いなく地震のことであると推測できる。

「岩手宮城内陸地震はいわば想定外の地震だったが、それ以外にも宮城県はおよそ三〇〇四〇年に一度の間隔で、宮城県沖地震と呼ばれるM七・五規模の地震に襲われてきた。考えてみれば、日本全国でこれだけ定期的に大きな地震に襲われている地域は他にないのではないか。その意味では、確かにここ宮城県は、自然災害ワーストワンと言えるかもしれない。

研究成果の活用前に起きた大地震

東日本大震災から一年半が経過した。昨年三月一日に発生した地震は、一九七八年の地震から三三年が経過し、いつ起こってもおかしくないと言われていた宮城県沖地震ではない、それを恐ろしいまでに大きく上回るM九・〇の超巨大地震であった。マグニチュードが〇・一大きくなると地震のエネルギーは約一・四倍、一大きくなるとおよそ三・二倍にもなる。今回の地震は、想定されていた宮城県沖地震のエネルギーを、実に一八〇倍近く上回る地震だったわけである。

の沿岸地域においては、およそ八〇〇〜一、一〇〇年の周期で今回の東日本大震災と同規模の超巨大地震とそれに伴う大津波に襲われていたというのである。「日本三大実録」という文献に残されていた記述から、今回の地震の前の地震は八六九年の貞観地震であることも分かっている。その記述や津波堆積物調査の結果から、貞観地震においても巨大津波が発生し、その浸水域は今回の東日本大震災とほぼ一致することも判明した。

「森の防波堤」で防災とがれき処理を

一方、今回の地震における死者のほとんどは津波によるものであった。防潮堤を過信しない、大きな地震の後はずっと高台に避難する、といったこの地に住む我々がしっかりと認識しておくべきソフト面での対策もより強化する必要があるが、とは言え、やはりハード面の整備も必要である。今回、仙台平野沿岸の防潮林は、津波によって根こそぎ倒されてしまった地域も多かった。しかしその一方で、防潮林がしっかりと残った地域もある。この違いはいったい何だったのだろうか。

えられていたものだった。対して、根こそぎ倒された防潮林は、砂地に直接植林されたものがほとんどであったのである。そして、残った防潮林の中には何と、伊達政宗の時代に遡るものも多くあった。先ほど、今回の地震に匹敵する地震は八七四年まで遡ると書いたが、こと大津波に関しては、それだけではなく、平均するとほぼ二〇〇〜四〇〇年に一度仙台平野を襲っていることが分かっている。前回は一六一一年の慶長三陸地震、その前は一四四四年の享徳地震である。そのうち一六一一年の地震は、伊達政宗が居城を仙台に移して一〇年後に起こっている。この時の大津波は、政宗の城下町づくりにも大ダメージを与えたと伝えられる。

今、震災がれきの処理が復興の大きな課題となっている。広域処理を唱える環境省に対して、がれきを受け入れる側の自治体では、放射線に対する不安から受け入れ反対の住民運動が起きたりしている。そうした中、がれきを有効活用して防潮林を再生させようという取り組みが始まっている。がれきを細かく粉砕して、砂地の上の土台づくりに活用すれば、しっかりと根を張った、いざという時に役立つ防潮林がつくれるというのである。横浜国立大学名誉教授の宮脇昭氏が「森の防波堤」として提唱し、宮城県内ではその主張に賛同した人たちが実際に取り組みをスタートさせている。

「備えあれば憂いなし」、天災は忘れた頃にやってくる、いずれも先人たちの貴重な教えである。今回の地震の教訓を風化させてはならない。復興の足を引っ張る国など差し置いてでも、次なる地震に対する備えを進めるべきである。今こそ地方自治体は「伝家の宝刀」を

国土交通省でもこの点を問題視して、つり天井の対策ガイドラインを出しているが、強制力があるものではなく、改善は進んでいないようである。ところで、地方自治体には「伝家の宝刀」がある。「上乗せ条例」、「横出し条例」の制定である。法律より厳しい基準を課す条例を「上乗せ条例」、法律が定めていないことについて規制する条例を「横出し条例」と言う。記憶に新しいのは、首都圏八都府市の連帯で国に先駆けてデューゼルの走行規制を実現した首都圏環境確保条例の制定である。

既存・新設を問わず、つり天井を持つ施設に対して崩落対策を義務付けるという条例を、少なくとも四〇年以内にまた大きな地震が来ることを予測されている宮城県並びに県内の自治体は制定すべきではないだろうか。何度でも言うが、国に任せていては、迅速かつ実効性のある地震対策は望むべくもない。再び宮城県沖を震源とする地震が起きる。実際に被害を受けるのは、霞が関や永田町ではなくこちらなのである。今回の地震の教訓を余すところなく活かして「防災先進地域」をつくる。それが未曾有の大震災を経験し生き残った我々の義務なのではないかと思うのである。

執筆者紹介

大友浩平 (おともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/



大友浩平氏

Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo

され、建築物の耐震基準が大きく強化された。そのお陰で、それ以後に建てられた建物やブロック塀はこの時の地震と同等以上の地震に襲われてもたやすく倒壊しないものとなった。

この時のことを教訓に、三年後に建築基準法が改正された。過去の地震について、残っている文献や遺跡に残る地震の痕跡の調査などからその規模や被害状況などを推定する学問である。また、ボーリングによる津波堆積物の調査も大きく進歩した。その結果、宮城県沖を震源とする、三〇〜四〇年周期の地震とは異なる超巨大地震について、今回の地震の少なくとも四年前にはある結論が導き出されていた。それによる、宮城県を始めとする太平洋

今回の地震は、想定されていた宮城県沖地震のエネルギーを、実に一八〇倍近く上回る地震だったわけである。地震学における研究の結果が実際の地域防災計画に反映される前に、今回の地震が起きてしまったことである。例えば、宮城県沖地震で想定されていた津波の高さは「平成一四年度仙台市地震被害想定調査報告書」によれば、〇・三〜一・一mである。M七・五程度の宮城県沖地震を想定したものであるためにこのような予測となったが、今回の地震で仙台平野を襲った津波は少なくとも高さ七・二mに達した。

今回、仙台平野沿岸の防潮林は、津波によって根こそぎ倒されてしまった地域も多かった。しかしその一方で、防潮林がしっかりと残った地域もある。この違いはいったい何だったのだろうか。実は、残った防潮林は、盛り土をしてしっかりと土台をつくったところに松が植

ところが、がれきの広域処理にこだわる環境省は、この防潮林再生の取り組みには消極的なのだという。つくづく東京のど真ん中にあると現地のことが見えぬのだと実感する。今、仙台の高台に立つ防潮林を見ると、櫛の歯が欠けたような防潮林が見える。これを一刻も早く再生させ、がれきを土台に自然の防潮堤を作れば、今回の地震でひとまず震源域のエネルギーは解放されたという宮城県沖地震が三〇〜四〇年後に再びこの地を襲ったとしても、それによる津波で人命が失われるような結果にはならないはずである。

「備えあれば憂いなし」、天災は忘れた頃にやってくる、いずれも先人たちの貴重な教えである。今回の地震の教訓を風化させてはならない。復興の足を引っ張る国など差し置いてでも、次なる地震に対する備えを進めるべきである。今こそ地方自治体は「伝家の宝刀」を

国土交通省でもこの点を問題視して、つり天井の対策ガイドラインを出しているが、強制力があるものではなく、改善は進んでいないようである。ところで、地方自治体には「伝家の宝刀」がある。「上乗せ条例」、「横出し条例」の制定である。法律より厳しい基準を課す条例を「上乗せ条例」、法律が定めていないことについて規制する条例を「横出し条例」と言う。記憶に新しいのは、首都圏八都府市の連帯で国に先駆けてデューゼルの走行規制を実現した首都圏環境確保条例の制定である。

既存・新設を問わず、つり天井を持つ施設に対して崩落対策を義務付けるという条例を、少なくとも四〇年以内にまた大きな地震が来ることを予測されている宮城県並びに県内の自治体は制定すべきではないだろうか。何度でも言うが、国に任せていては、迅速かつ実効性のある地震対策は望むべくもない。再び宮城県沖を震源とする地震が起きる。実際に被害を受けるのは、霞が関や永田町ではなくこちらなのである。今回の地震の教訓を余すところなく活かして「防災先進地域」をつくる。それが未曾有の大震災を経験し生き残った我々の義務なのではないかと思うのである。

『遠野と私の物語』

その地は東北人を東北へ呼び戻す

九月、岩手県遠野市で行われる「遠野郷八幡宮例大祭」あるいは分割された姉妹祭「遠野まつり」に私が出かけるようになってから、気が付けば今年で十六年目になる。一九九六年から二〇〇六年までは当時住んでいた東京から、二〇〇七年からは現在住んでいる仙台から、ある年は鉄道やバスで、またある年は原付オートバイで北に向かっていた。



奥羽越後現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出演し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

笠祭には一度も行った事がない(内陸ではなく海側の出身という事もあり)、東北の祭の筆頭である青森ねぶたなどの夏祭は行く事はあってもせいぜい四、五年に一度である。特に考えた事もないが、遠野の祭こそは毎年必ず行ってしまう、私の中で唯一絶対のイベントなのだ。

大きな事を書くようだが、遠野を初めて訪れた日の前と後では、自分はまるで別人のようにも思える。それまで私は東京で生きていくのが当然と考えていたのに、その日を堺に、再び東北で生きてみたい、と思うようになったのだから。一体、遠野とはいかなる場所か、私のような「東北を離れ東京に向かった若者」にいかなる揺さぶりをかけたのだろうか。

東北に住む多くの若者と同じく、私は「東北には何もなし」と思っていた。本やテレビで知る世界には、こんなにも様々な物が溢れ、驚くべき才能が行き交っているのに、自分が生まれ育つこの地には腹立たしい程に何もなし。中学の頃にはこの憎むべき地を脱出し広い世界へ漕ぎ出す事しか頭になかった。

ところが、東京に出るしかない、と考えていた私に思いがけない事が起きた。大学受験に失敗し東京で浪人生活を思ったところ、兄の住む札幌の予備校ならば通ってよし、との条件が出たのだ。札幌など、山形よりも東京から遠い未知の地方都市。当然全く眼中になく戸惑ったが、今思えばこれが後の遠野への衝撃につながる旅であった、と言う事ができる。

札幌・北海道と遠野を結ぶもの、それは「アイヌ」、縄文の末裔である。私は所謂大手ではない、地元札幌の小さな予備校に通ったのだが、ある日自由選択の特別講座として、アイヌ民族の萱野茂氏によるビデオでの講義があった。ふとした興味で受講したが、初めてアイヌ民族とは何かを知った私の中にはずっと何かが残り続けた。東京に出た後も、気がつけばアイヌ関連の書籍や情報を求めていた。私は、東京の生活に夢中に思える反面、始めから「北方の」何かに取り付かれていたのだ。

何故、私は北海道先住民アイヌの存在に惹かれたのか。自然の一部となつて誇り高く生きてきたその文化と、圧倒的な国家権力に虐げられてきたその歴史に共感し、憧れていたのだ。しかし、自分は彼らを侵略し苦しめてきた側の人間である。私は、「自分とは何なのか」という問題に突き当たっていた。

そもそも、私は東京に何を求めてやってきたのか。ここに来れば「何か」になれる。本当の、なるべき自分になって、それを世界に示す事ができる。そう考えていたのだ。ところが、この巨大都市で見出したのは中身の無い空虚な自分のみ。自己を見失った私の東京生活はいびつで、矛盾を抱えたものになっていった。

遠野との出会いは、その葛藤にひとつの決着をつけ、私自身を全く新しい段階へ「進化させた」とも言える出来事だった。(いちいち大げさな表現で、恐縮である。)

きっかけは、上京三年目に郷の母が病に倒れた事である。私は半年程、町の図書館から様々な本を借りて、入院中の母の傍らでそれらを読んだ。その中に、今和次郎についての本があった。実は私が東京へ出ようと思った契機は高校時代に映画『帝都物語』を観た事だったが、和次郎はこれ



しし踊りのしし達

に少し登場した、青森県出身の実際のユニークな民俗・建築学者だった。その師とも言える人物が、かの『遠野物語』の著者、柳田國男なのだった。しかし私が惹かれたのは、柳田という人物でも、遠野物語という作品でもなく、むしろ本の元となる物語を提供した佐々木喜善と、彼の生まれ育った遠野という土地そのものであったと思う。実際に遠野へ行こう、と思いついた経緯は記憶に残っていない。ただ、二人の東北の先人の存在が、その入口にはつきりと今もある。

遠野は周囲を廣大で緩やかな山々に囲まれた、小さな町である。しかしそこで行われる秋の祭を訪れた私は、目も眩むような衝撃に襲われ、こう直感した。「アイヌを超えた!」と。アイヌの方々に怒られそうだが、これはこういう事だ。アイヌ民族の伝統の舞に、男が二人、腰の刀を抜いて向き合い、振りかざして刃を合わせる、という場面がある。遠野の代表的な芸能・しし踊りでも、戦士姿の少女が刀を抜いて想像上の獣・ししと対峙する。その舞の美しさはアイヌのそれ以上、且つ独自のものと思われたのだ。自らの憧れであるアイヌとの共通性を感じた。東京に住む郷土の中に見出す事、尚且つその憧れを超える、または独自性を見る瞬間を持つ事。そこで私は初めて見失

っていた自分を新たに発見する糸口を得、それまで何もなかったと思っていた郷土東北が、実は他所のどこにもない凄じい何かを持った場所である事を認識したのであった。実は、しし踊りという芸能そのものは、江戸期に畿内から持ち込まれたと言われ、他では見られない独特な「しし」の姿も、外来の神・牛頭天王の化身だと言い、また舞の奉納される八幡宮も外来の征服者側の神とされる。しかし実際にその場に立ち、目にすれば、それが全て後付けの肩書きにしか思えず、知る者はどうしてアイヌ文化と同じ香りや息遣いを感じてしまうはずである。かなで木を削って作る長い髪を振り乱して踊るししの姿に大陸の北方民族のシャーマニズムの流れを指摘する学者もおり、どうやらこの遠野、そして東北という地が西南の大和的文化とアイヌほか北方文化のぶつかり合う場所である事がわかってくる。アイヌ民族を侵略した「大和民族」の先鋒でありながら、かつては侵略された側でもあった。それを知らず、東北人は二つの民族に挟まれた複雑な、且つ豊穡な自らのアイデンティティを獲得するのだ。私の心ははつきりしていた。東京に住む意味はもはやなく、できるだけ早く東北で生き直さねばならない、と。

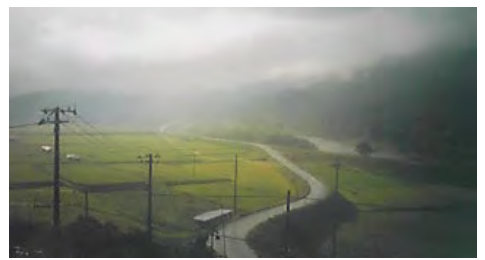
しかし、遠野について考えねばならぬ事が今一つある。おそらく観光的表现として謳われる、「日本のふるさと」という代名詞だ。これは一体どういう意味なのか。

私自身の「ふるさと」は山形県の湯野浜という、海岸砂丘のある温泉町である。その風土、風景は岩手県山中の盆地町のそれとは大きく異なっている。私はこの本当の「ふるさと」に対しては、少年時代の「ここから逃げ出したい」の一心だった記憶を未だに引きずるところがあり、家族の存在をもつてしても、「東北回帰」を決意させる地にはなり得なかった。とは言え、私自身が「田舎での生活に絶望する若者」としての苦しみを身にしみて知っているから、いくら遠野に衝撃を受け、ここに愛着を持つていくといつても、現実的には同じような「田舎」であるこの地にだって、かつての自分のように絶望し、都会へ飛び出していきたいと願う若者は存在するだろう、という想像力くらいはある。遠野まつりに見られる数々の芸能団体に、多くの少年少女、子供たちの姿が見られるが、地元の人に聞けばやはり子供は減ってきている、という。

「東北学」で知られる赤坂憲雄氏が言う。「都会に出ていった人々が、都合の良い時だけ振り返って求め、身勝手なイメージ」それがふるさとである、と。

ここで思い出されるのは、柳田國男がその作品の基とした「物語」を、失われてゆく故に記録すべき過去のもの、と位置づけていたのに対し、物語を提供した遠野人・佐々木喜善はこれを永久に生まれ続ける現在進行形のものとして捉えていた、という事である。私は本誌先月号に「アイラン」ド音楽は伝統とはいえず、若者にも見直され、新たに生まれ続ける現代の音楽でもある」と書いたが、喜善の考える遠野、東北の物語とは、そういうものだったのだ。考えてみれば、私は遠野に「日本のふるさと」を求めて向かったのではない。そこはかつて、大和政権に最後まで抵抗した「蝦夷」、そのリーダーであ

る阿弖流為の本拠地を含めた地盤にある。私が引き寄せられたのは、云わば誰も見たことのない、私自身だけでなく日本そのものをひっくり返してしまいかも知れない、東北の隠された真の姿。それはまさに「新天地」の予感だったのである。



朝霧の中の遠野

最後に、何故そこまで遠野に衝撃を受け、実際に「東北回帰」を果たしながら、移住した先が仙台なのかについて書いておきたい(言い訳っぽい)。以前も書いたように、まず東北で一から暮らし始めるなら仕事面・気候面で仙台が便利である事だが、他にここから遠野への距離と、郷・山形県庄内地方への距離がほぼ同じである事に注目された。私にとつて、この二つは新天地東北の両軸であるが、遠野・岩手に住めばこの地を愛するあまり他の地が見えなくなってしまうかも知れない。ここはまず最も大切な場所とは距離を置き、東北全体を見渡せる都市に身を置こう、と。佐々木喜善もまた遠野を離れ、この仙台で東北各地の物語を収めていったのである。

とは言え、近年仙台の音楽仲間たちも遠野を好きになつてくれて共に旅したりするようになり、事ある毎に私に言う。「つべこべ言わず移住しろ」と。確かに、この先はわからない。遠野と私の物語は、常に現在進行形なのだから。

「東北学」で知られる赤坂憲雄氏が言う。「都会に出ていった人々が、都合の良い時だけ振り返って求め、身勝手なイメージ」それがふるさとである、と。

最後に、何故ここまで遠野に衝撃を受け、実際に「東北回帰」を果たしながら、移住した先が仙台なのかについて書いておきたい(言い訳っぽい)。以前も書いたように、まず東北で一から暮らし始めるなら仕事面・気候面で仙台が便利である事だが、他にここから遠野への距離と、郷・山形県庄内地方への距離がほぼ同じである事に注目された。私にとつて、この二つは新天地東北の両軸であるが、遠野・岩手に住めばこの地を愛するあまり他の地が見えなくなってしまうかも知れない。ここはまず最も大切な場所とは距離を置き、東北全体を見渡せる都市に身を置こう、と。佐々木喜善もまた遠野を離れ、この仙台で東北各地の物語を収めていったのである。とは言え、近年仙台の音楽仲間たちも遠野を好きになつてくれて共に旅したりするようになり、事ある毎に私に言う。「つべこべ言わず移住しろ」と。確かに、この先はわからない。遠野と私の物語は、常に現在進行形なのだから。



「蝦夷の地へ」2009年 20号水彩 個人蔵

異国での 「内なる東北」との出会い そこから また新たな旅がはじまる

プロフィール

古山拓(ふるやまく) 岩手県出身・宮城県仙台市在住。水彩画家・イラストレーター。個展と広告イラストレーションの二本柱で活動。東北とケルトの地を描く事で独自のアイデンティティを模索中。
www.termnet.co.jp/
furyama/
trumpet-tugboatsesae.net
facebook.com/yakufuryama



古川拓氏

正直に言おう。私も以前から東北にこだわっていた訳ではない。蝦夷と大和の対立の歴史も十代の頃は知らなかった。東北生まれのアイデンティティなんて、若かったころはこれっぽっちも感じていなかった。むしろ、「田舎臭い」と、若いゆえの大きな勘違いをし、東北に目をつぶって二十代まで過ごしてきた人間だ。

今思い返すと、私の少年時代(一九六二年生まれです。ウルトラマンの世代です)は、東北に誇りを持つような学校教育を受けた記憶が、あまりない。

前回ケルトと東北のことに触れたけれど、ケルトへの興味だって子供の頃から意識していた訳ではない。東北回帰への大きなきっかけの一つは、イギリスのランズエンド岬をめざした旅にある。一九九七年のことだ。

◇
いまだからこそ、ランズエンド岬があるコーンウォール半島は、ケルトの地と認識しているけれど、当時はそんなことはつゆ知らず、「あこがれの岬のある地」でしかなかった。

十日間ほどかけてロンドンから岬までをバスと列車でふらふらと絵を描きながら旅したのだが、セントア

イブスなる町で、一人の現地の男性に出会った。

彼は、私が訪れた持ち帰り専門の中華料理店の店主だった。

私が料理の出来上りを待ちながら、なにげに壁に備え付けられたテレビを見てみると、テニスの試合が放送されていた。試合の一方の選手はアジア系だった。

すると、カウンタ―越しに店主が話しかけてきた。「彼女は私とルーツが一緒、中国人だよ」

そのときの胸の張り方のなんと誇らしげだったことか。会話は片言の英語だったけれどそのときの彼の言葉はこう続がれた。

「きみは、どこから来たんだ？」

シンプルなその言葉は、言外の意味を持ってわたしの心に突き刺さった。そして、出来上がった料理を持って宿に帰る道すがら、その言葉がぐるぐる頭の中をまわっていた。

◇
「自分の国籍は日本だ。けれど、なにかが違う。」

国籍以上のなにか大きな問いをつきつけられた気がした。

◇
異国をバックパッカーとしてさまよっていると、嫌が心にも地元の人と接する機会が多くなる。そこで出会った人たちの暮らす地への

とめどない愛情は、旅という非日常の行為を続けていると、深く心に届くものがある。そんな体験を積み重ねてきたからだと思う。問いへの答えはほどなく見つかった。

「自分の暮らす地を知らずに世界をみたところで、海外優越病にかかっておしまいじゃないか……」

導き出されたキーワードは、「東北」だった。

◇
帰国後、旅で描いた絵で初めての個展を開いた訳だけれど、同時に次の旅の目的地が決まっていた。もちろん、東北だ。それからというものの、いまままで何気なくみていた東北の景色がかわりはじめた。意識していなかった歴史もいたるところから私の目に姿を現しはじめた。

◇
アンテナをきちんとたて、チューナーをあわす事で、自分自身が「東北」を受信し始めた、そんな感じだった。

◇
東北を歩き始めたそんなある日、蝦夷と大和の古戦場をめぐるため、岩手の胆沢地方にスケッチに出かけた。その旅のチューニングは「アテルイが馬を駆っただろう地」だった。アテルイとは、その昔、水沢、江刺、胆沢地方にいたとされ

上段の絵：2009年の制作、「蝦夷の地へ」
内なる東北との出会いの後の制作
下段の2枚の絵：1997年の制作
1997年はイギリスのランズエンドを目指した旅をした年である

る蝦夷連合を率いて大和朝廷軍に半旗を翻した英雄の名だ。ちなみに私ははずかしながら、東北を歩き始めて以降、その存在を知ったくちだ。

そのとき、地元の小学生達と話す機会があった。機会と言っても、挨拶をされた、そんな程度だ。その時、ふと「アテルイを知っているかい？」と聞いてみた。「うん！」と力強くうなずく子供達。

愚問だった。

彼らは自分たちが「どこから来たのか」をきちんと教えてもらっている……。

そのときの子供達の凛とした表情がたくましかった。ふと、異国で出会ってきた、地元を胸を張る人々とだぶってみえた。



「ランズエンド」1997年 6号水彩 個人蔵



「セントアイブス」1997年 4号水彩

笑い仏 福島への行脚 第三回

誕生地である鳥取から行脚を続けながら、縁のあるお寺に逗留させてもらい、少しずつ福島の間を指す「笑い仏」さん「こと」がれき光背仏」。その旅程を見守る我々MONKフォーラムが、仏さんを仲立ちに旅の途中で頂戴した出会いの諸々について書き綴るのが、このコラムの趣旨です。能福寺(兵庫県神戸市)での出会いにも、たくさんそして様々なものがありました。例えば、地元の神戸鈴蘭台高校の新聞部の学生さんが取材に来てくれ、根掘り葉掘りを尋ねられて楽しい時間が過ごされたこともよい思い出です。また、遠く神奈川から来てくれたタイからの留学生の皆さんがお参りに来られ、タイ語で福島への思いをノートに書いてもらったのも嬉しかったです。しかし、やはりNHK「大河ドラマ」での知名度があるため、平成盛に関する出会いがここでは多かったように思います。



清盛茶屋 (この会館の中に笑い仏さんが安置)

笑い仏さんが逗留中の九月九日には、お寺のある「福原」が放送で舞台になっていました。最寄駅すぐそばには、NHKと広告会社が建てた「歴史館」なる大きな特設プレハブが建ち、そこから、清盛にまつわる古跡を巡るツアーも出発します。清盛公が眠る「平相国廟」を持つ能福寺にも当然ツアー客が多数寄りま

すから、関連イベントがいっつも用意されています。その一つが「清盛茶屋」と称したちよつと小粋な空間です。その会場である寺院会館に、笑い仏さんは安置されていました。そこでは、神戸の若い劇団員の皆さんが務める「清盛お接隊」なるメンバーが金曜日と週末に登場し、壇ノ浦と松王丸のドラマパフォーマンズを見せて

くれました。また、同じ会場では、神戸夙川学院大学の学生さんらの企画で、清盛も食べたかもしれない「清盛も食べたか平安の旨味セット」という食事も振舞われました。これらのイベントが行われる中に、笑い仏さんがにっこりと座っておられたのです。さぞ賑やかに感じられたことでしょう。そして、能福寺での最後の日には、予定にはなかったのですが、お寺さんに臨時に会館を開けてもらいました。この日には、それまでの出会いを締めくくつかのよう不思議な出会いがあったのです。この方を最後の結縁者として、仏さんは須磨寺へと旅立たれました。それは、参拝客の皆さまを、我々MONKフォーラムの二人が冷房の効いた会館に案内し、笑い仏さんの説明や今後の旅程などを話していたときのことでした。相棒の長谷川が、会話をしていたご老人に広島弁のイントネーションを感じ取った(彼は転勤で広島に数年滞在)のです。彼が、「広島ですか?」と尋ねると、「え、分かる!」とその男性が嬉しそうに応じたことから、一時間近く話し込んでしまいました。

聞くと、この松島さんという方は広島県の酒どころである西条のご出身とのこと。我々が、お寺の初代の大仏さんが金属回収令で鉄くずになされ、危うく戦場で人命を殺める鉄砲の弾になるところだった、という話をすると、「よう分かる。わしらも子供のころは、家にある鉄という鉄を持って行かれたからな...」とのことでした。実家は数人の使用人を雇い、多くの家畜も飼育していた家だったそうですが、やはり全ての鉄を供給させられたそうです。ただ唯一、牛の世話に必要だった大きな鉄鍋だけは、お父上が抵抗し、うまく隠してやり過ごしたとのこと。戦争時代、そして終戦直後のご自身にまつわる話を、長時間にわたって聞かせて頂きました。「飛行場の滑走路の小石を拾うのじゃが、素足で夏は足が焼けるようで、冬は痛いし...」

という、学徒動員時の日課の話や、「グラマン」と呼ばれた米戦闘機機の機銃掃射を、河原の土手でどのようにかわしたか、という生々しい話を、松島さんは噛み締めるように話されてきました。同時に、物が何もなかったその子供時代に、山に入つてどのような遊びをしたのか、また、空腹を野生の知恵でどのように上手くやり過ごしたか、などという話を、どんどん興が乗ってきたの身振り手振りを交えながら、話されていました。お茶を出しながら、我々二人も身を乗り出して聞き入りました。本当に大変な時代だったのです。我々の父親の世代より五、十歳上の方だったので、父親からは「いざいざ」といって、お寺のすぐ前には、我々と同世代で関西で小学生時代を過ごした人々にとつてあまりに有名な「須磨海岸」、そして「須磨の水族館」があります。

ここは真言宗須磨寺派の大本山でもあり、全国に轟く名刹です。思えば、この笑い仏さんの巡礼の旅ですが、蓋を開ければ逗留先の寺が一つ残らず古刹・名刹という中間結果を示しています。まず一番目の圓教寺からして「西の比叡山」の別称を持ち、西国三十三箇所観音霊場の二七番札所という名刹です。次の二番目の鶴林寺は、国宝の本堂と太子堂を持つ、やはり関西屈指の名刹。そして三番目の天上市は、お釈迦様の生母・摩耶夫人を本尊とする日本唯一の寺であり、多くの現代的なイベントでも知られる有名なお寺。全くその界限に人脈を持たなかった我々MONKフォーラムが、「笑い仏を福島へ届けたい」というシンプルな一心だけを頼りに見切り発車させたプロジェクトでしたが、数珠繋ぎのように縁が結びついて今に至るプロセスには、妙なるものがある。という形容しかできません。



語り部の松島さんと笑い仏さん



寺の中にある、平敦盛と熊谷直実の像

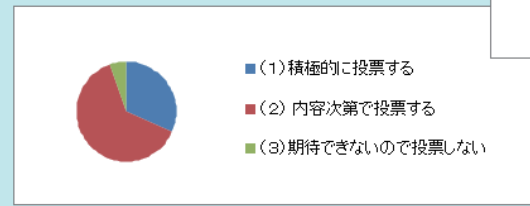
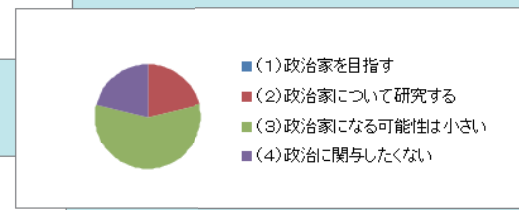
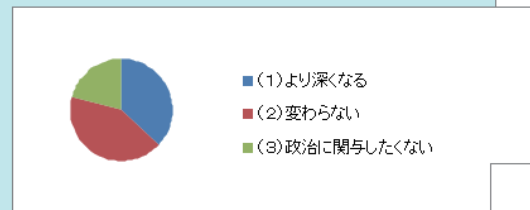
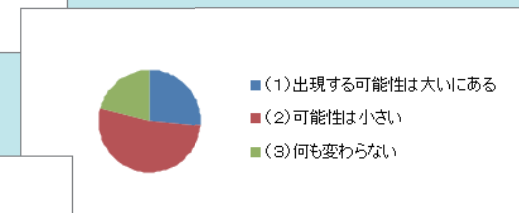
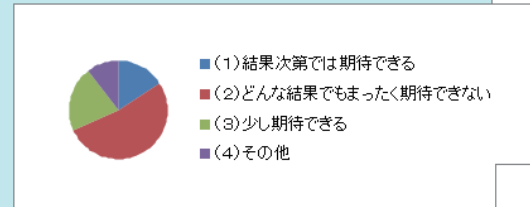
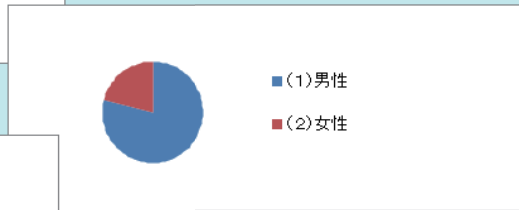
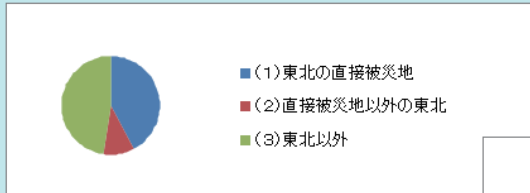
して、近世以前に建立された東西両塔が残る日本唯一の寺として知られる奈良県の當麻寺(たいまでら)の中坊。この、本人たちの思惑を離れてどんどん勝手に繋がっていく「仏縁」の力に、しばし呆然となることがあります。そして先日、この笑い仏さんの発揮する並々ならぬ「縁結び」の力に、我々が本気で震撼する出来事が起こりました。なんと、共同代表である長谷川が、仏さんが中京地方に入られるまさに直前のタイミングで、名古屋に転勤することになったのです!しかも、能福寺を出立する数日前にいきなり辞令が出て、十月からは名古屋で職務開始という慌しさ。「ま、まさか、会社は笑い仏さんのこと知らんよなあ?」と二人で顔を見合わせるほど、奇妙な、あまりに奇妙な符合でした。

実際、関西を活動の中心においてきた我々ですが、笑い仏さんの逗留寺に聞しても、「三重の辺りぐらいいまでは何とかなりそうやが、名古屋からはどういしょう?」と心配していたのです。静岡には、力になってくれる頼もしい別団体がおり、関東に入れば、私の人脈(寺脈?)が使えるはず。しかし、この「名古屋」エリアには、全く何もありませんでした。でも、だからって笑い仏さん、何もメンバを転勤までさせなくても...。こうして、がれき光背仏に魅入られたかのようなMONKフォーラムの行脚は、これからも続いていくのです。道中の詳しい模様は、公式サイト: <http://www.monk-forum.org>にてご覧下さいませ。

モロ坊円瓢(平原憲道) MONKフォーラム共同代表

第4号 ネットアンケート集計結果【東北復興と政治の関係について】

NO.	質問と選択肢	回答数
①	現在すんでいる場所	
	(1) 東北の直接被災地	8
	(2) 直接被災地以外の東北	2
	(3) 東北以外	9
②	性別	
	(1) 男性	15
	(2) 女性	4
③	年齢	
	(1) 20歳未満	0
	(2) 20歳以上40歳未満	6
	(3) 40歳以上60歳未満	9
	(4) 60歳以上	4
④	いままでの東北復興と政治力発揮	
	(1) 十分発揮された	0
	(2) 不十分	13
	(3) まったく発揮されてこなかった	6
⑤	今度の国政選挙で事態は変わるか	
	(1) 結果次第では期待できる	3
	(2) どんな結果でもまったく期待できない	10
	(3) 少し期待できる	4
	(4) その他	2
⑥	新たな政治勢力の出現可能性について	
	(1) 出現する可能性は大いにある	5
	(2) 可能性は小さい	10
	(3) 何も変わらない	4
⑦	東北復興実現への政治的関与について	
	(1) より深くなる	7
	(2) 変わらない	8
	(3) 政治に関与したくない	4
⑧	自身が政治家になる可能性について	
	(1) 政治家を目指す	0
	(2) 政治家について研究する	4
	(3) 政治家になる可能性は小さい	11
	(4) 政治に関与したくない	4
⑨	仮に「復興実現党」ができたらどうするか	
	(1) 積極的に投票する	6
	(2) 内容次第で投票する	12
	(3) 期待できないので投票しない	1



今回のアンケートは、なかなか進まない東北復興と政治の関係という生々しいテーマでしたが、前回以上の十九名という多くのご回答をいただきました。ありがとうございました。

回答内容を見ますと、まず、これまでの東北復興に政治力が十分に発揮されてこなかったというのが約2/3、残りがまったく発揮されていないという予想通りの回答でした。

次は、来るべき選挙でどんな結果が出るかが期待できないというのが半分以上。新たな政治勢力の出現可能性についても半分以上の人が悲観的。そしてそれぞれの人の政治への関わり方も、より深くなるという意見と変わらないという意見に分かれました。とはいえ、自ら政治家になる可能性は大半の人が小さいと回答。

最後の質問である「仮に「復興実現党」ができたらどうするか」という設問には、6割超の人が、内容次第で投票する。約3割の人が積極的に投票するという結果でした。

全体としては、進まない東北復興の現状を打開して欲しいけれども、あまり今の政治には期待できない。よほどの新勢力でも出現すれば話は別だが、というつぶやきが聞こえてきそうな印象のアンケートでした。

編集後記

この第五号の特筆すべき特徴は岩手県づくしだったということです。遠野祭もそうですし、釜石からの沿岸部取材もそうでした。山田町の夏祭も取上げました。これまで宮城県に偏りがちだったのですが、第五号にしてはじめての挑戦でした。次は福島を大々的に取上げなければならぬと思っています。

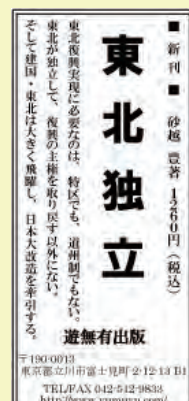
東北と一口にいいますが、地理的にも広いですし、文化もさまざま、その歴史もさまざま、一律には語れません。東北という統一した定義を無理やり作って、そこにすべての文化を位置づけるような窮屈なことはしたくはありません。そうなると思え、活きた文化が窒息するかもしれない。むしろ埋もれかけている文化を掘り起こし、従来の文化に加えることで、多様な文化を花開かせる必要があると思います。

文化は、継承者がいないと一世代で簡単に消えてしまいます。一度消えた文化を改めて掘り起こす作業は、継承作業に比べたら、数倍、数十倍の労苦が伴うと思います。そうした点で、遠野祭は大いに参考にすべきです。遠野祭取材は、「まちぐるみの祭」という意味をあらためて考えさせる貴重な機会でした。



『東北独立』 砂越豊 著
価格：1,260（税込み）

時間が経過すればするほど『東北独立』という選択肢がより現実的になってくる



河北新報広告掲載
2012.2.12
2012.3.13

あなたの著者制作、お手伝い致します！
電子新聞発行のお手伝いを致します！
お気軽にご相談ください。



『立ち上げられ、オジサン！』
砂越豊 著



『もうひとつの構造改革』
砂越豊 著

※電子新聞創刊特別値引

上記2冊ともに 1260円⇒500円（税込）

遊無有出版

検索

遊無有出版
YUMUYU Publishing

立川事業所 042-512-9833
本社 042-562-3507

立川事業所 yumuyu@wj8.so-net.ne.jp
本社 contact@yumuyu.com